

日文研叢書 49

古丁研究

「満洲国」に生きた文化人

梅 定娥



日文研叢書 49

古丁研究

「満洲国」に生きた文化人

梅 定娥

国際日本文化研究センター



こ
て
い
古
丁
研
究

「満洲国」に生きた文化人

梅
定
娥

Kotei
A Cultural Icon in Manchukuo

Written by
MEI Ding'e

©2012 by the International Research Center for Japanese Studies
3-2 Oeyama-cho, Goryo, Nishikyo-ku, Kyoto 610-1192, Japan
Tel. 075-335-2222 Fax. 075-335-2091 <http://www.nichibun.ac.jp/>

NICHIBUNKEN JAPANESE STUDIES SERIES (日文研叢書) No. 49 (2012)

ISSN 1346-6585

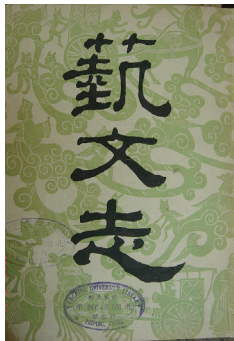
Printed by Tamekuni Printing Corporation



『明明』第1卷第6期、1937年8月
吉林省図書館蔵



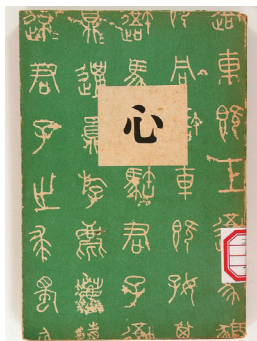
『明明』第2卷第4期、1938年新年号
中国国家図書館蔵



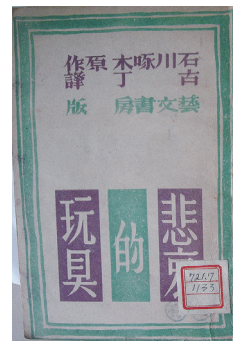
事務局『藝文志』
北京大学図書館蔵



聯盟『藝文志』第7期、1944年5月
中国国家図書館蔵



夏目漱石著・古丁訳『心』、満日文化協会
1939年、中国現代文学館蔵



石川啄木著・古丁訳『悲哀の玩具』
藝文書房、1943年、遼寧省図書館蔵



古丁著『譚』、藝文書房、1942年
国際日本文化研究センター蔵



藝文志別輯『小説家』、1940年12月
中国国家図書館蔵

古丁研究——「満洲国」に生きた文化人

目次

序

第二節 中国左翼作家聯盟北方部での活躍

17

一. 本研究の立場、目的と方法

3

第三章 「満洲国」時代

20

二. 古丁に関する従来の研究と、その問題点

5

第一節 『明明』時代

21

一. 苦悶と昇華

21

三. 調査概要と本書の構成

7

二. 『明明』創刊と旧文芸との闘い

23

三. 「郷土文芸」に関する論争

25

四. 日中戦争と古丁

32

第一部 古丁の生涯

11

第二節 事務所『藝文志』時代

33

第一章 誕生から大学入学まで

13

一. 「漢話」への態度

34

二. 「そっくりそのまま頂戴する」

37

三. 健康隔離

40

第一節 生い立ち

13

第二節 長春公学堂から北京大学へ

14

第三節 芸文書房時代

42

一. 芸文書房

42

第二章 北平時代

16

二. 解半知「第一建國から第二建國へ」

46

三. 再び漢語保持の主張

51

第一節 北京大学に入学

16

四. 「思無邪」から見た戦時下の思想

55

	第三章のまとめ	61		第三章 『明明』期の翻訳活動	89
	第四章 「満洲国」崩壊後から死去まで	61		第一節 「魯迅著書解題」	89
				第二節 『悲しき玩具』	92
				第四章 『藝文志』期の翻訳活動	96
				第一節 『こゝろ』	97
				一．出版・翻訳の経緯	97
				二．言語実験としての直訳	99
				三．翻訳法に見られる魯迅の影響	103
				第二節 『井原西鶴』	106
				一．『井原西鶴』の翻訳とその内容	106
				二．『井原西鶴』翻訳の特徴	108
				第三節 『譯叢』の翻訳作品	111
				一．「狂人日記」	112
				二．「一夜」	114
				三．「夢がたり」「アッタレーア・プリンケプス」	115
				第二章 「満洲国」時代の文学翻訳の概況	86
				第一節 「満洲国」の文芸の翻訳状況	86
				第二節 「芸文誌派」の活躍	88
				第三節 「芸術理論に於けるレーニン主義のための闘争―忽卒な覚え書」	82
				第二節 「紙幣乾燥室の女工」	78
				第一節 「味方―民族主義を蹴る」	76
				第一章 日本プロレタリア文学作品の翻訳	76
				第二部 翻訳活動	73

四 「給仕、もう一杯」

第三部 創作活動

139

第五章 芸文書房期の翻訳活動

119

第一章 北平時代——「貴重な経験——
天津恒源紗廠女工の闘い」

143

第一節 『学窓と社会』

119

第二章 『奮飛』

144

第二節 『若き英雄トルデイ』

121

第一節 知識人題材小説

144

第六章 対米英戦争期の翻訳

123

一 革命運動後の知識人——「頽敗——大学生らの横顔」

145

第一節 『米英東亜侵略史』

123

二 旧礼教の告発——「皮箱」

149

第二節 「殲滅せんのみ」

125

三 日中全面戦争開始後の詩人——「昼夜——ある詩のない
詩人の日記」(晝夜——一個無詩的詩人的日記)

150

第三節 「宮本武蔵」

127

第二節 農村題材小説

151

一 農村題材小説とその背景

152

二 農村農民をいかに描いたか

152

第二部のまとめ

131

第三節 「原野」

153

一 「味を失った塩」

153

二 社会背景の欠如

154

三. 「原野」に現れた問題意識

155

第四節 『奮飛』について

一. 『奮飛』の目的

157

二. 「うわついた調子」

158

三. 『奮飛』に対する評価

159

第三章 『浮沈』『平沙』

162

第一節 『浮沈』

162

一. 凍った春、冬の時代——「春朝」（春晨）

162

二. 個性の押し殺しへの憎しみ——「笑顔」

163

三. 矛盾した作者の自画像——「夜語」

164

四. 「無文豪への皮肉」——「仮眠」「荒地」「聖手」

166

五. 低迷文事——「窄門」

168

六. 自己激励、意志、向上——「新歎」「独歩」「墨書」

169

第二節 「平沙」

174

一. 「平沙」の主な内容と問題点

174

二. 「芸文志派」の評価

176

三. 顧盈の批評

178

四. 「新」「旧」の構図

179

五. 登場人物の特徴および作者古丁との関係

182

第四章 『竹林』

186

第一節 詩人の反省——「鏡花記」

186

一. 作者・作品・読者（社会）三者関係についての反省

187

二. 「鏡花記」に見られるその他の思考

188

第二節 資本主義社会の人間関係への批判——

189

「マジックミラー」（哈哈鏡）

189

第三節 市民生活への関心——「盤中記」「花園」

191

一. 「盤中記」

191

二. 「花園」

192

第四節 強権下知識人の苦悶生活——「竹林」

193

一. 「劉伶飲酒」から「竹林」へ

193

二. 「竹林」と『藝文志』同人

195

三. 嵯康と阮籍のそれぞれの結末に対する考察

195

第五章 「新生」「下郷」「山海外経」

196

第一節 「新生」

一. 小説の内容

196

二. 特徴

197

三. 「新生」に現れた主な問題

201

四. 隔離病院を出た後

203

第二節 「下郷」

205

一. 「下郷」の内容とその意味

205

二. 明るい農村世界

206

三. 「下郷」に現れた問題意識

207

第三節 「山海外経」

208

一. 内容

208

二. 主題——帝国主義と中国人気質への批判

209

三. 新しい文学手法の試み

210

第三部のまとめ

211

第四部 編集出版活動

227

第一章 『明明』と「城島文庫」

229

第一節 創刊の経緯

230

第二節 総合雑誌としての『明明』

233

第三節 文芸雑誌としての『明明』

236

一. 創作

237

二. 評論・エッセイ

241

三. 翻訳

242

四. 『明明』の収めた成果

243

第四節 「城島文庫」

244

一. 「城島文庫」刊行の経緯

245

二. 「城島文庫」にまつわる議論

248

第二章 芸文志事務所とその出版活動

252

第一節 芸文志事務所

252

一. 芸文志事務会の成立	252				
二. 芸文志事務会メンバー	254				
三. 古典文学との関係	293				
第二節 事務会『藝文志』	258				
一. 創刊	258				
二. 「芸文志派」の文学	265				
第三節 その他の出版物	271				
一. 広告にとどまった出版計画	271				
二. 芸文志別輯『小説家』	272				
三. 「讀書人連叢」——『讀書人』と『文学人』	276				
補論一 芸文書房の理想と出版物	296				
補論二 芸文書房のその他の出版物	298				
一. 「快読文庫」	298				
二. 「鑑賞叢書」と「国学叢刊」	298				
三. 「興亜叢書」	299				
四. 「日語総合講座」など	299				
補論三 「芸文志派」関係の出版物	300				
一. 『麒麟』	301				
二. 『電影画報』	304				
三. 「新現実文芸叢書」	309				
第三章 聯盟『藝文志』	279				
第一節 創刊の経緯と編集上の特徴	279				
一. 創刊について	279				
二. 性格	281				
第二節 聯盟『藝文志』の内容	283				
一. 「聖戦」協力	283				
二. 報告文学	292				
第四部のまとめ	310				

第五部 結び

325

③ 古丁作品一覧

358

一. 北平時代

327

④ 古丁年譜

363

二. 『明明』時代

328

三. 事務会『藝文志』時代

330

四. 芸文書房時代

332

五. 今後の課題と展望

335

引用文献一覧

337

附録資料編

341

① 調査資料一覧

343

② 雑誌の目次

348